

国史跡盛岡城跡

—第 39 次調査—

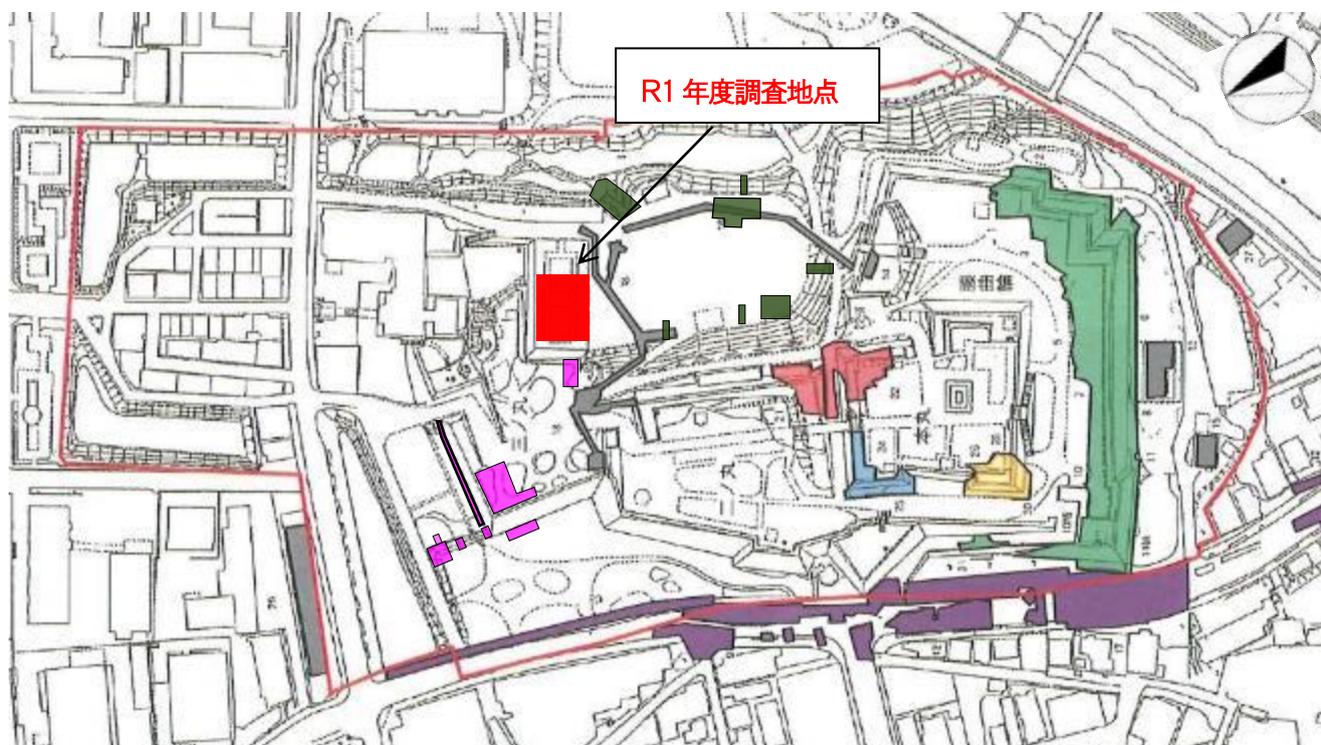
○盛岡城について

盛岡城は、旧北上川と中津川の合流点の丘陵地を利用して築かれた平山城です。初代盛岡藩主南部信直と2代藩主利直親子によって慶長2年(1597)から築城が開始されました。おおよその完成を見た寛永10年(1633)に3代藩主南部重直が入城して以来、南部氏20万石の居城となりました。

明治維新後、盛岡城は陸軍省の所管となり、城内建物の保存も検討されましたが、荒廃が進み維持が困難なことから、明治7年(1874)にそのほとんどは取り壊されてしまいました。その後、公園整備の計画が進められ明治39年(1906)に「岩手公園」として開園しました。また、往時を偲ばせる雄大な石垣が良好に残されていたことから、昭和12年(1937)に国指定史跡に指定されています。

○発掘調査について

築城以来、400年以上も風雪に耐えた石垣ですが、近年傷みが目立ちはじめ、崩落の恐れも心配される箇所も出てきました。そこで盛岡市は、平成24年度に「史跡盛岡城跡整備基本計画」を策定し、崩落の恐れのある一部石垣の解体修復(積み直し)を行い、それに伴う発掘調査を平成25年度より実施しています。また、史跡の整備を進めるため台所門枅形跡、土橋跡などの発掘調査も同時に行っています。



盛岡城跡全体図および発掘調査実施箇所

■ 本丸北東・二ノ丸南東 (H5~6)	■ 淡路丸 (S59~H2)
■ 本丸北西 (H8)	■ 本丸南西 (H10~12)
■ 三ノ丸北西・南東 (H25~)	■ 台所 (H28~)
■ 都市計画道路拡幅 (S62~H1)	■ 確認調査等

第 39 次発掘調査成果(8 月 10 日現在)

調査期間 令和元年 6 月 10 日～同年 9 月中旬 (予定)

調査位置 三ノ丸南東下 (旧バラ園)

調査目的 台所地区史跡整備に伴う事前調査

調査面積 約 600 m²

確認した遺構

掘立柱建物跡 1 棟・竪穴建物跡 2 棟・溝跡 4 条 (江戸中期以降)

焼土遺構：江戸中期以前 2 箇所・江戸中期以降 4 箇所

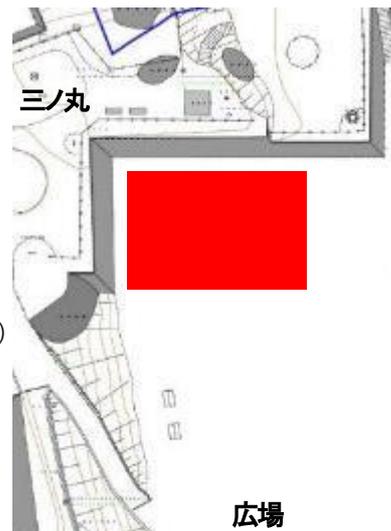
鍛冶関連遺構：江戸中期以前 3 箇所

石垣：根石・根石据方 (盛岡城 2 期)

出土遺物

漆の濾殻, 漆パレット, 赤色顔料, 砥石, 円盤形土製品

陶磁器, 鉄製品, 鉄滓, 縄文土器片, 須恵器片



第 39 次調査区位置図

調査内容

第 39 次調査区は、広場の北側に位置し、以前はバラ園が存在した場所です。ここには「明和三年書上盛岡城図」を見ると『御塗師小屋』と記された建物が描かれています。この建物がどのような性格の建物なのか、実際にこの場所に存在するのか等、今後の史跡整備の基礎資料とするために発掘調査を実施しています。

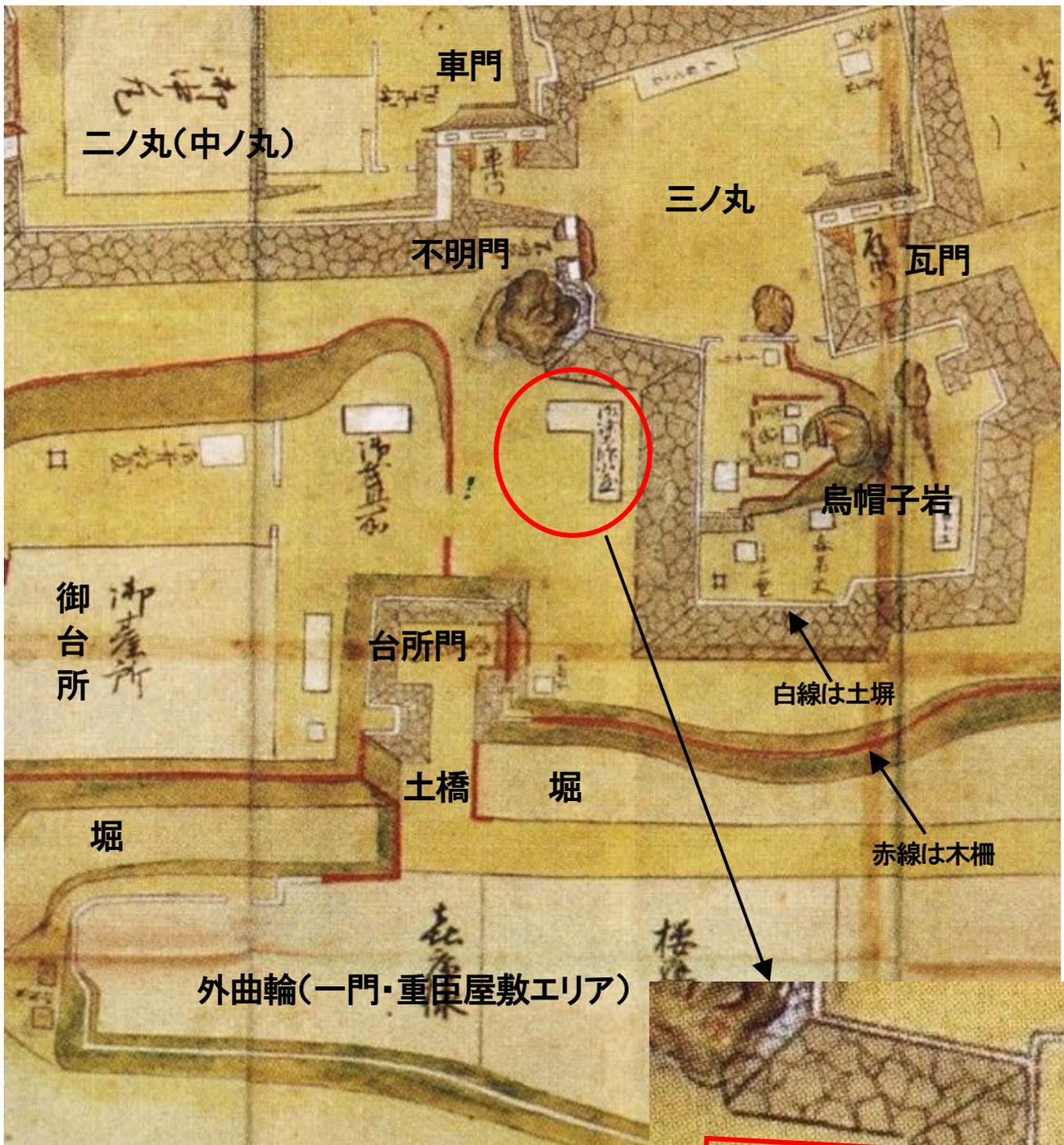
SB001 掘立柱建物跡・・・身舎梁間 5 間、桁桁 8.5 間の南北棟に身舎梁間 4.5 間、桁桁 10 間の東西棟が組み合わさった L 字形の掘立柱建物跡を確認しました。柱間寸法は概ね 6 尺 3 寸 (約 191cm) で、柱の掘り方の直径は 50～80 cm、柱の太さは約 10cm です。一部の柱穴から 18～19 世紀の陶磁器が出土しています。建物跡の規模としては、これまでの盛岡城跡の発掘調査で確認された中で最大級の大きさとなりますが、絵図等を参照すると城内の中では小さな部類になります。建物内には大小色々な部屋が存在し、ここで漆に関する様々な作業が行われていたと考えられます。また、この建物跡を構成する柱穴の周りには、重複してより古い柱穴が確認できることから、「塗師小屋」が何回か建替えられた可能性があります。今回、確認した建物跡は「塗師小屋」の最後の状態を表しているのかも知れません。

SI002 竪穴跡・・・SB001 掘立柱建物内の中央に位置し、一辺が 3.5m、深さ約 50cm の竪穴跡。埋土は人為堆積で灰白色粘土層 (A 層) と黒褐色粘質土 (B 層) の 2 層に大別できます。A 層からは、漆精製の際に使用した和紙製と考えられる『濾殻』、漆の付着した陶磁器、漆パレット (石製)、赤色顔料、鉄釘、砥石、円盤形土製品 (用途不明) など、「塗師小屋」の名称どおり漆に関する遺物が多数出土しています。出土した遺物は「塗師小屋」が使われなくなってから廃棄されたものと考えられますので、竪穴の実際の用途については調査中です。

鍛冶関連遺構・・・史跡の調査は、保存が前提なので全て掘り上げて詳細を把握することはできませんが、多量の炭と鉄滓が投げ込まれた平面形が不整形または細長い竪穴状の遺構を複数確認しています。鍛冶関連遺構が掘り込まれている層は、「塗師小屋」建物跡がある生活面よりも下層であることから、「塗師小屋」が建つ以前に、この場所で鍛冶関連の作業を行っていたことを窺わせる遺構です。

根石据方・・・三ノ丸南東石垣は修復が必要となる場所ではありませんが、石垣の根石がどのような状況なのか把握するため、三箇所を部分的に調査しました。この石垣は盛岡城 2 期 (元和 3 年 : 1617 年) に築かれた石垣で、盛岡城の中では比較的古い時期になります。入隅 (石垣が内側に折れ曲がる箇所) の下は大きな転石 (地中に残る花崗岩) が存在し、その上に直接石垣を築いていることがわかりました。また、東側の石垣根石は、上部の築石ラインより少し前に出して設置されています。この根石の設置方

法は、これまで盛岡城内の石垣では確認されたことのない方法で注目すべき点です。



「明和三年書上盛岡城図」 (三ノ丸～台所付近一部抜粋)



※明和3年(1766)とあるが、家臣名や石垣の状況から、実際は元禄16年(1703)の状況を表す絵図面と考えられる。

『濾殻』について

第39次調査区からは漆に関連する遺物が多数出土しています。中でも、多く出土しているのが『濾殻』と考えられる遺物です。濾殻とは、器や建具などに漆を塗る前に中に混入している不純物を取り除くため、使用する濾紙（和紙）が廃棄されたものです。この濾殻は、S I 002 竪穴跡の埋土、S B 001 掘立柱建物跡の柱穴の中や当時の生活面と考えられる層の中など、調査区全体から出土しています。この『濾殻』の発見こそ、ここが漆に関わる作業が行われていた場所、すなわち『塗師小屋』であることを証明しているのではないのでしょうか。



濾殻出土状況（S B 001 掘立柱建物跡柱穴内）



盛岡城跡第39次調査出土『濾殻』

『塗師』について

『塗師』とは、漆を扱う職人の古い呼称で、当時の盛岡藩では複数の塗師を抱え込み、職務に当たらせていたようです。しかし、塗師の名前は、御抱え諸職人の台帳である「御支配帳」や家老日記の「雑書」などに度々、出てくるものの、具体的にどのような作業を行っていたのかは、現在のところ不明です。



『御支配帳』（延享元年～2年）



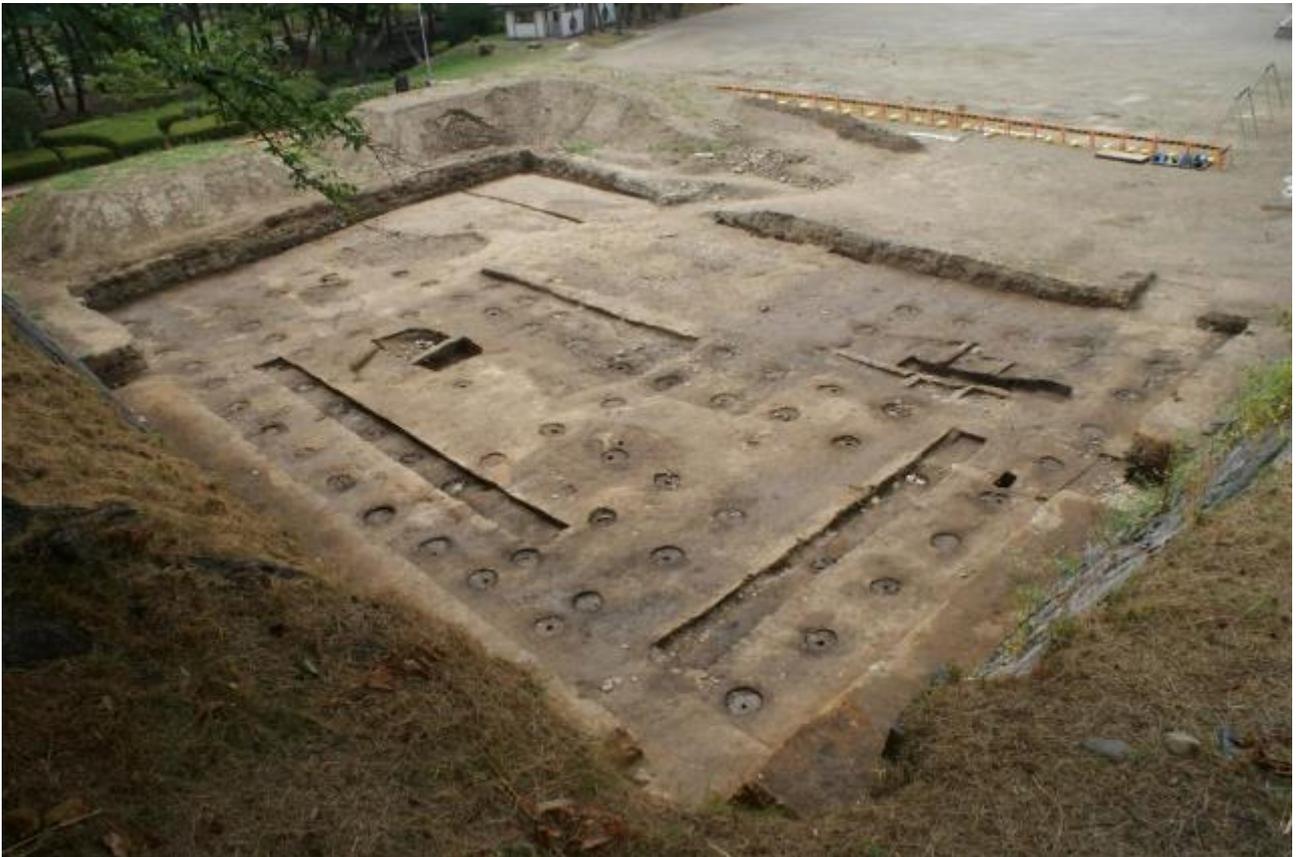
一 式拾八石 三人御扶持	一 式拾八石 五駄現米 同 庄之助	一 式拾八石 三人御扶持 塗師棟梁 平十郎
--------------------	-------------------------------	-----------------------------------



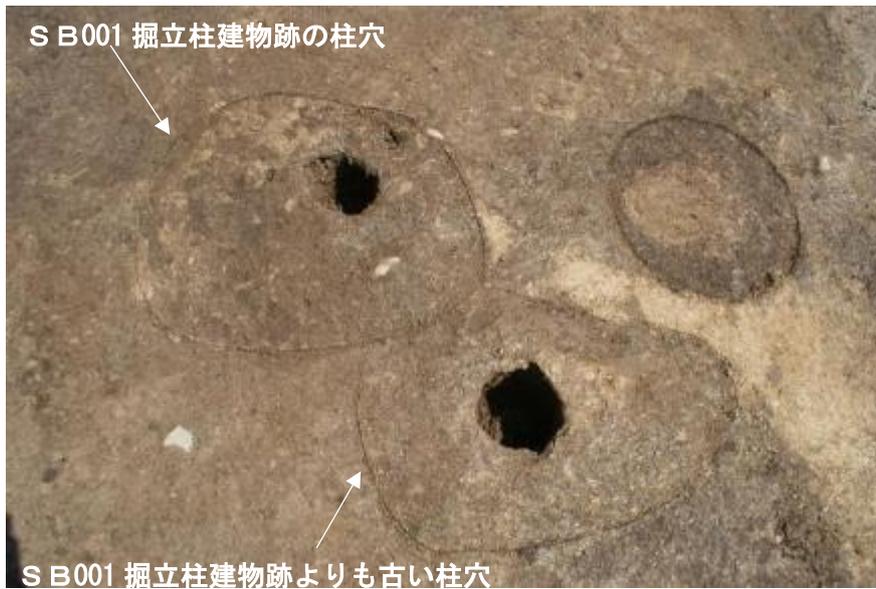
盛岡城跡第 39 次調査区全体図



S B001 掘立柱建物跡 全景（北西から）



S B001 掘立柱建物跡 全景（北から）



柱穴の新旧重複状況（南西から）



S I 002 竖穴跡の遺物出土状況（南から）



円盤形土製品（用途は現在のところ不明）



円盤形土製品出土状況
（S I 002 竖穴跡）



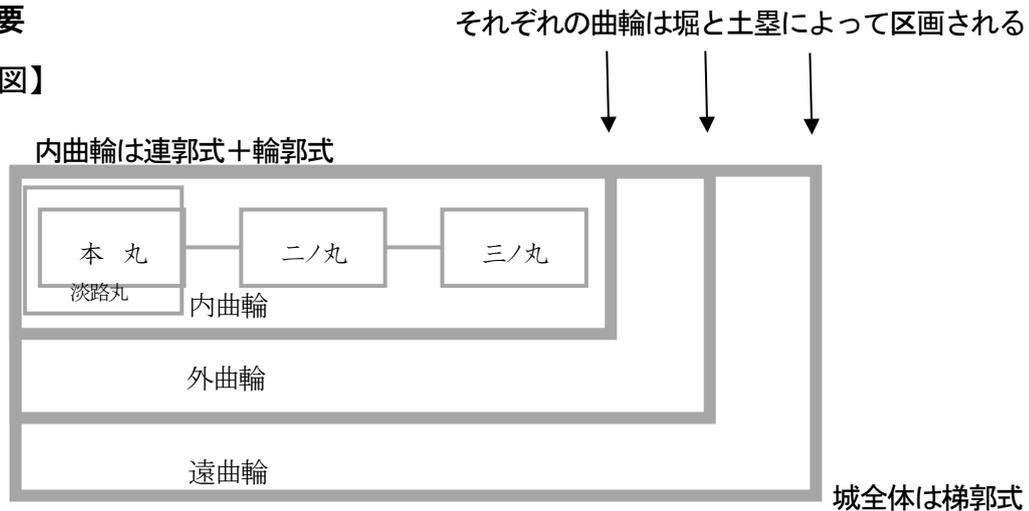
三ノ丸南東石垣入隅部の根石据方検出状況（南から）



三ノ丸南東部中央付近の根石検出状況

盛岡城の概要

【概念図】



(1) 基本構造

- ① 北上川と中津川の合流点に接した丘陵部に築城(平山城)
- ② 本丸がある内曲輪を要とし、外曲輪、遠曲輪(総構)の順に扇形に配置(梯郭式)
- ③ 曲輪のそれぞれが堀と土塁で画される。
- ④ 内曲輪は、本丸・二ノ丸・三ノ丸と、下曲輪が段下がりであり、腰曲輪(淡路丸)、榊山稻荷曲輪、台所などの部分から構成(連郭式+輪郭式)

※石垣のある内曲輪だけが盛岡城ではない。三つの曲輪を合わせて『盛岡城』となる。外曲輪(内丸～芝生広場)は他の城郭であれば「三ノ丸」と呼ばれている場所にあたる。

(2) 築城工事等

- ① 築城総奉行…南部信直の嫡子利直を総奉行に歟(鋤)初(慶長2年<1597>)
- ② 着工年代……慶長2年(1597)～慶長3年(1598)
- ③ 工事期間……40年以上→工事の中断(最上出陣, 信直の死去, 中津川・北上川の洪水等)
- ④ 仮居城……三戸城・福岡城(寛永12年<1635>)・郡山城(寛文7<1667>に廃城)
- ⑤ 完成時期……寛永10年(1633)頃←同年8月, 利直の死亡によって重直の初入部(盛岡入)

(3) 築城・石垣普請に関わった人物

- ① 内堀伊豆頼式…近江国出身で元は浅井氏家臣。浅井氏滅亡後、前田利家に仕えていた。九戸合戦後、信直の招聘により南部家に移り、実際の築城の助言者となる。
- ② 奥寺八左衛門…石垣奉行。貞享3年銘石垣(二ノ丸西側)に刻字あり。
- ③ 野田弥右衛門…石垣奉行。貞享3年銘石垣と宝永2年銘石垣(三ノ丸北側)に刻字あり。
- ④ 川守田弥五兵衛…石垣奉行。宝永2年銘石垣に刻字あり。

(4) 改修事業

- ① 落雷による本丸御殿の延焼(寛永13年<1636>)
- ② 頻繁な石垣普請…洪水・火災・石垣の崩壊
- ③ 本丸の「三重矢倉(櫓)・二階矢倉」の再構築(寛文13年<1673>)
- ④ 三重矢倉(三階櫓)を「天守」と改称させる(天保13年<1842>)

盛岡城の石垣

(1) 石垣の積み方

①乱積…大ききの異なる石を積上げる方法。石の大きさがバラバラなので、目地は通っていない。

盛岡城の中では、自然石を加工せずに積む方法（野面積）と、石と石が重なる面を増やすため、接合部を打ち欠いて積む方法（打込接）が確認されている。

②布積…大きさが揃った石を横に並べて積上げる。石の大きさが均等で、目地が横に通っている。

③算木積…石垣の隅（コーナー）の積み方。長方形に整形された石を長短互い違いに積む。



乱積(三ノ丸西側)



布積(三ノ丸北側)



算木積(瓦門北東隅)

(2) 矢穴の種類

矢穴…石材を分割するクサビを打ち込んだ痕。

時期ごとに長さが異なる。

- ・盛岡城1期…9cm～13cm
- ・盛岡城2期…14～21cm（盛岡城で最大）
- ・盛岡城3期以降…4～6cm（盛岡城で最小）



(3) 石垣の種類

乱積…本丸御末門南東部，本丸御末門南東出隅，三ノ丸不明門西側，二ノ丸東面，淡路丸北東隅，淡路丸南西部，本丸三重櫓台，三ノ丸不明門東，二ノ丸南東部，三ノ丸瓦門南東部

布積…二ノ丸西側，二ノ丸北西部，二ノ丸北東，二ノ丸車門，榊山曲輪北，榊山曲輪東，乗者，淡路丸ハバキ，二ノ丸東側ハバキ，二ノ丸北東部石土居，本丸小納戸櫓台

(4) 石切丁場遺跡

- ・東安庭の見石・日影山・金勢に，江戸中期～後期の石切丁場。なだらかな丘陵に大小の花崗岩。矢穴痕の石材が確認。矢穴の大きさから，延宝～宝永年間・寛保年間以降の石切場
- ・城内にも矢穴痕の石材あり。築城当初は城内・近傍（慶善館）から採石された。
- ・外曲輪（本町通りの堀）・八戸氏屋敷（現県庁付近），紺屋町，紫波町長岡から採石・運搬した記録あり。
- ・上米内・白石地区に，石材供給の伝説あり。花崗岩の転石が露呈してるが，矢穴なし。

城内に残る石材調達痕跡

○双子石

自然石を半分に分割し、その半面同士がピッタリと一致する石垣の築石。お互い、近い場所に積み上げられていることから、積み上げ直前に割ったと考えられる。他の城郭ではあまり見られない、盛岡城のみの独特な築石である。



三ノ丸南東部南面の東側



三ノ丸南東部東面の中央



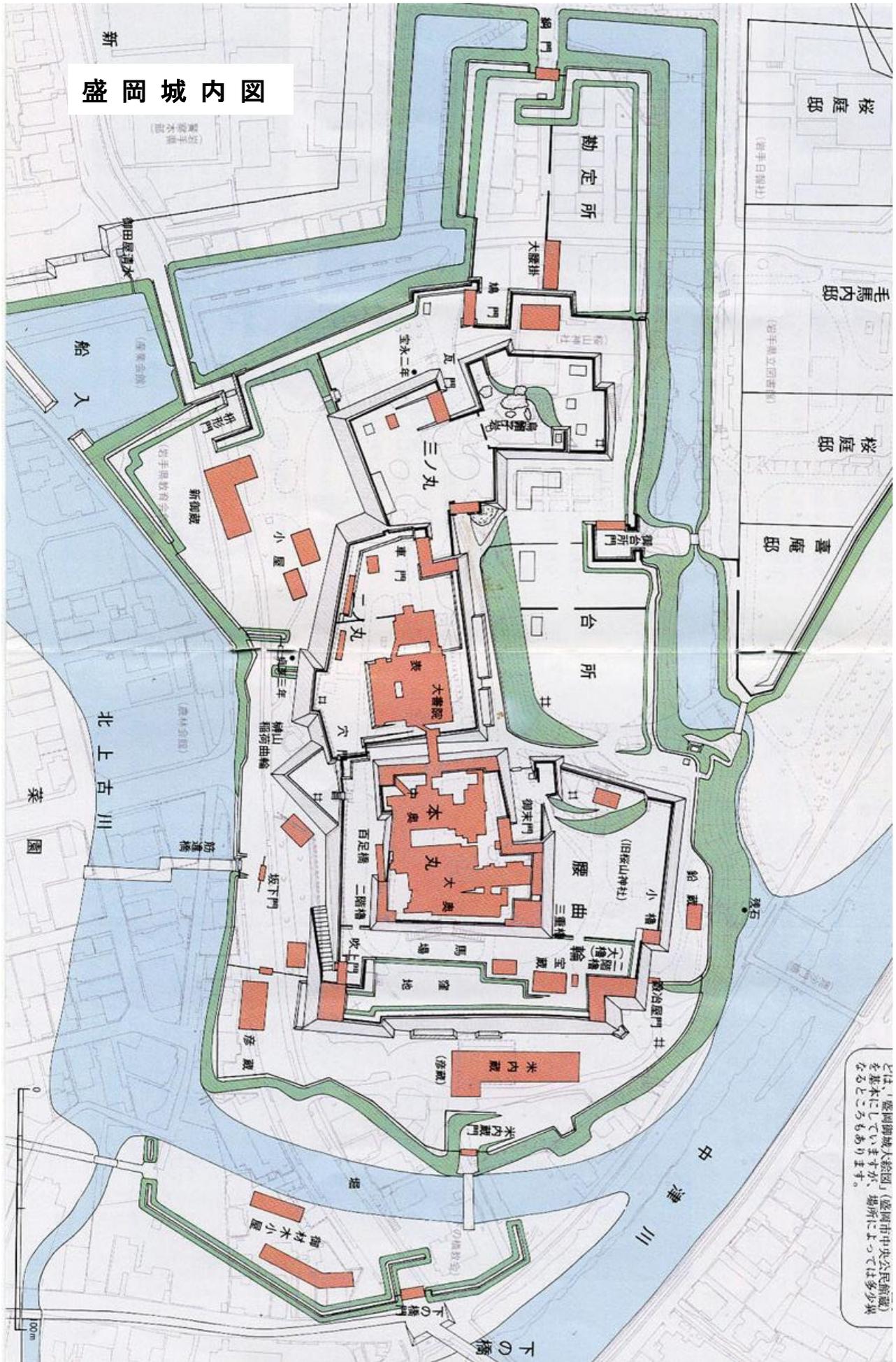
三ノ丸南東部東面の階段横

盛岡城の石垣様式と遺構の変遷

時 期		年 代	概 要	
不 来 方 城 期	①	不來方城1期	14世紀末頃～	丘陵の頂部から中腹にかけて城郭が築かれる。
	②	不來方城2a期	15世紀末 ～16世紀前半	丘陵裾部まで拡大される。後の本丸・二ノ丸・三ノ丸・腰曲輪の前身の曲輪が存在した。
		不來方城2b期	16世紀後半	本丸付近の堀改修。腰曲輪の嵩上げ。
盛 岡 城 期	③	盛岡城1期	16世紀末 (慶長2年:1597)～	不來方城を大改修。本丸、二ノ丸、城内主要虎口に石垣が築かれる(乱積)。石垣は、角石に割石、築石に野面石を用いた乱積。腰曲輪の法面は土手のままで木柵が廻る。
	④	盛岡城2期	17世紀前葉 (元和3年:1617)～	本丸、二ノ丸石垣の改修(本丸の拡張)。城の西側を除き、腰曲輪・三ノ丸に石垣が構築(乱積)される。石垣は築石に至るまで割石で乱積。建物に双鶴文(向鶴)の瓦が葺かれる。寛永13年(1636)本丸の大半を焼失。
	⑤	盛岡城3期	17世紀後葉 (寛文8年:1668)～	腰曲輪西側・二ノ丸西側・榊山曲輪の石垣が構築される(布積)。本丸三重櫓再建と腰曲輪などの主な櫓等に赤瓦が葺かれる。
	⑥	盛岡城4期	18世紀前葉～中葉 (宝永元年:1704)～	本丸西側、二ノ丸北東部、三ノ丸北側、腰曲輪西側などの石垣積み直し(布積)。腰曲輪南と二ノ丸東にハバキ石垣構築(布積、元文5年:1737～)。腰曲輪窪地の縮小。
	⑦	盛岡城5期	18世紀後葉 ～19世紀中葉 (～明治7年:1874)	腰曲輪窪地の埋め立て。腰曲輪南西隅櫓を廃止して吹上三社勧請。城内排水設備の整備。明治7年建物払い下げ、取り壊し。

(史跡盛岡城跡保存管理計画書より抜粋、一部加筆修正)

盛岡城内図



これは「盛岡藩城大図」(盛岡市中央公民館蔵)を基本にしていますが、場所によっては多少異なる場合があります。